

ら雛道具を中心に生産が行われていたようです。ちなみに静岡産雛道具は現在、全国で九十%のシェアを誇り、年間の生産高は百五十億円に上っています。

志太の人形作り

●雛祭り^{てんじんにんぎょう}と天神人形

志太地区では三月、所によつては月遅れの四月三日の節句に「天神さん」を飾る家が多くあります。この雛祭り^{せきく}と天神人形の関わりについて少し説明しましょう。

天神とは、平安時代の学者、菅原道真のこと。平安末期から道真は天神として恐れ、あがめられていました。また、農耕の神としても信仰を集めていました。江戸時代になると寺子屋を中心に、学問の神、書道の神として広く親しまれるようになります。

天神）が作られるようになりました。江戸時代の雛文化が一般の家庭にも浸透していくにつれて、静岡県でも雛人形の生産が行われ、発展していくのですが、その人形作りの発祥となったのが、この志太土天神なのです。

志太土天神を作り始めたのは、大井川町上新田の青野嘉作氏（天保八年（一八二七）～明治三十六年（一九〇三））といわれています。青野氏の祖先が住んでいた美濃国（岐阜県）から土細工師を呼び寄せて作り始めたという説がありますが、その発端は定かではありません。青野氏の祖先が、稲作に被害をもたらしていたウンカの有効な駆除方法を発見し、農学者の大蔵永常がそれを『除蝗録』という書物にしているところから、それと引き換えに、大蔵氏から青野氏へと土人形の製法に関する情報が伝えられたとも考えられています。古いものでは、

そして、全国各地で土、木、練り物、張り子製など郷土色豊かな天神人形が作られるようになりました。さらに正月や三月、五月の節句に、男児の祝いとしてこれらの人形を飾る風習も生まれていきます。この人形のことを「雛天神」と呼びました。

静岡県でも雛祭りに天神人形を男の子のお雛様として飾る風習が江戸時代からあったといわれています。特に静岡県中部地方では、一番、特大、番外と呼ばれる幼児が座ったほどの大きな衣装着の天神人形を「天神さん」と呼んで飾る風習が現在もあります。

●志太土天神の誕生

江戸時代から全国各地で作られた天神人形ですが、志太地区でも幕末から明治の始めにかけて土（練り）天神（通称、志太土



江戸時代の土天神